

教師のバーンアウトと自尊感情、ソーシャルスキルの関連

～ 教職経験年数別の検討 ～

曾山和彦¹・堅田明義²

(¹名城大学・²中部学院大学)

問題と目的

不登校やいじめ等の学校不適応問題は、児童生徒を取り巻く社会状況、家庭環境、児童生徒自身の発達等、様々な要素が複雑に絡み合った問題である。それ故、問題解決・改善に向け、教育、心理、福祉等の分野の専門家による連携が強く求められる。1995年度以降導入されたスクールカウンセラーは、悩みを抱えた児童生徒に対する「心の専門家」として個別・心理的な働きかけを行い、その成果が整理されてきている（文部科学省、2009）。しかしながら、児童生徒を取り巻く状況の多様かつ複雑さ故に、個別対応に限界のある事例も多くあるのではないかと考えられる。Caplan（1970）は、イスラエル青年移民の精神衛生サービスとして、スタッフ（コンサルタント）が、青年たちの直接介護者（コンサルティ）と対等な関係で討議するコンサルテーション活動を実施し、その効果を明らかにした。Caplan の実践を学校現場に当てはめると、外部専門家がコンサルタントであり、教師がコンサルティとなる。外部専門家がより効果的なコンサルテーション活動を行うためには、教師の精神衛生面の状態を把握して討議に臨む必要がある。本研究は、教師の精神衛生面をバーンアウトの指標で捉える。また、バーンアウトを規定する要因として、先行研究（田村・石隈 2001 他）を参考に、自尊感情とソーシャルスキルの 2 要因を取り上げる。外部専門家とのコンサルテーションを行う構成メンバーは、児童生徒の問題状況により、ベテラン教師であったり、新人、中堅教師であったり、様々である。そこで、本研究では、外部専門家がどのように教師に働きかけたらよいかを、教職経験年数別に明らかにすることを目的とする。

方法

【調査対象】公立学校教師 135 名（小 95 名、中 40 名）。そのうち、欠損値のない 131 名（小 94 名、中 37 名）のデータを対象とした。

【調査時期】2008 年 7 月

【手続き】東海地区の 5 小学校、2 中学校に質問紙調査を依頼、郵送、回収した。

【測定具】自尊感情尺度（Rosenberg、1965）
ソーシャルスキル尺度（菊池、2007）
バーンアウト尺度（八並・新井、2001）

結果と考察

調査対象者を教職経験 5 年未満を「新人（N=13）」、5 年以上 10 年未満を「中堅（N=18）」、10 年以上を「ベテラン（N=100）」として分類した。教師のバーンアウトと自尊感情、ソーシャルスキルの関連を検討するために、自尊感情とソーシャルスキルの総得点を独立変数に、バーンアウトの 3 因子（情緒的消耗感、脱人格化、個人的達成感低下）それぞれの総得点を従属変数にして、重回帰分析（ステップワイズ法）を行い、結果をパス図として示した（Figure1～3）。図中の双方向矢印上の数値は相関係数、片矢印上の数値は標準偏回帰係数、バーンアウト 3 因子上の数値は決定係数であり、いずれも $p < .05$ である。

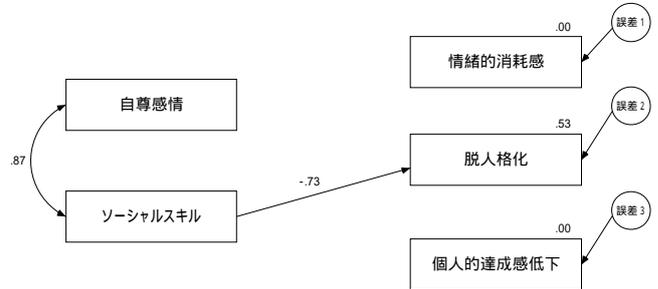


Figure1 バーンアウト 3 因子に対するパス解析（新人）

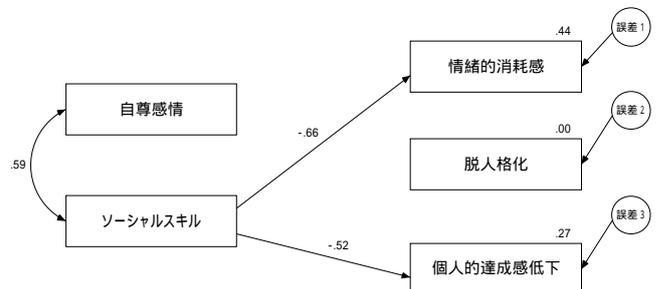


Figure2 バーンアウト 3 因子に対するパス解析（中堅）

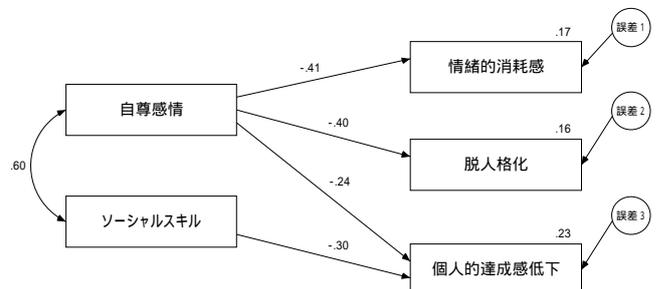


Figure3 バーンアウト 3 因子に対するパス解析（ベテラン）

結果から、バーンアウト 3 因子に関し、1)情緒的消耗感に影響を及ぼすのは、中堅はソーシャルスキル、ベテランは自尊感情である、2)脱人格化に影響を及ぼすのは、新人はソーシャルスキル、ベテランは自尊感情である、3)個人的達成感低下に影響を及ぼすのは、中堅はソーシャルスキル、ベテランは自尊感情とソーシャルスキルであることが示された。

これらの結果に基づき、外部専門家が学校に入ってコンサルテーション活動を実施する際、対象となる構成メンバーに応じて助言のポイントをおさえて臨む必要があることが考察された。

引用文献（一部）

- ・文部科学省（2009）『児童生徒の教育相談の充実について - 生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり -（報告）』教育相談等に関する調査研究協力者会議
- ・Caplan, G. (1970) 『The theory and practice of mental health consultation』New York: Basic Books